

日本の寺とは思えない異国情緒を感じさせる築地本願寺。現在の本堂は、旧本堂が大正12年（1923年）の関東大震災で焼失後、昭和9年（1934年）に再建されたものである。

浄土真宗本願寺派の仏教寺院でありながら、なぜここまでインド風建築様式と浄土真宗の文化が融合した独創的な建築が実現できたのか。その理由は、当時の門主大谷光瑞が、仏教のルーツ（天竺（インド））への興味を膨らませ探検隊を派遣するほど、海外文化への理解が深い人物だったからだと言われている。

設計したのは東京帝国大学名誉教授で建築家・建築史家の伊東忠太。忠太と光瑞の「仏教はもともとインド発祥。ならば建物も古代インド仏教様式で」という考えのもと、本堂の設計は進められた。

築地本願寺の外観は、インドを中心にアジアの古代仏教建築を模した忠太独自の建築様式によるものである。中央ドームのデザインは、菩提樹の葉がモチーフとされ、その中央にハスの花が描かれている。窓の形も、柱の飾りも独創的なデザインで、エントランスの床には幾何学模様のモザイクタイルが貼られている。本堂入口の扉上部には、美しいステンドグラスがはめ込まれている。

一方で本堂の内部は、浄土真宗の様式になっている。鉄筋コンクリートの柱と梁の上に、木造寺院独特の折上格天井が

DATA

名称 築地本願寺
所在地 東京都中央区築地3丁目15番1号
完成 昭和9年 設計者 伊東 忠太



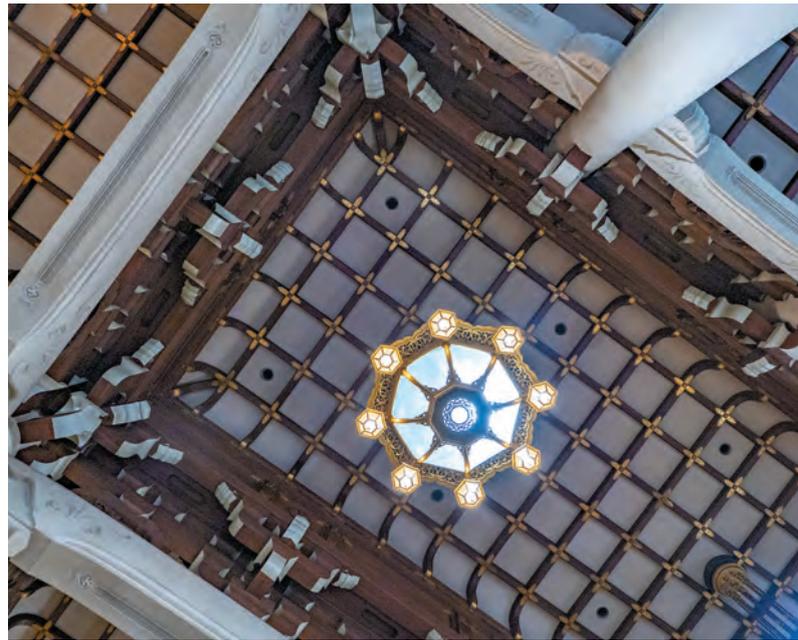
東京のレトロ建築を歩く 第9回

築地本願寺

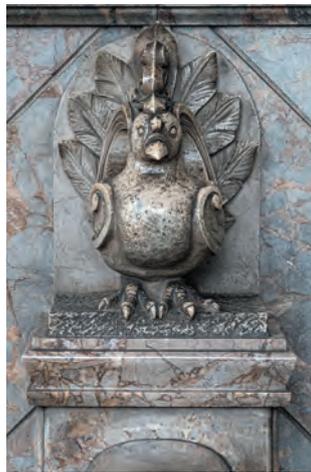




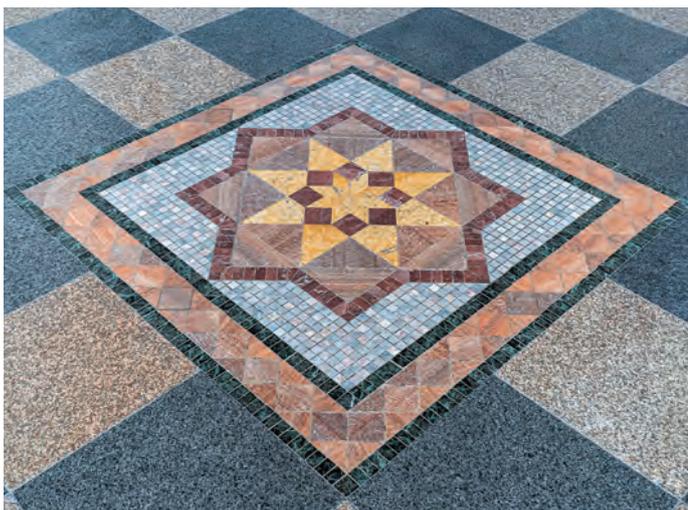
本堂の入口を飾るステンドグラス



コンクリートの柱梁の上にあつらえられた、
仏教寺院によくみられる折上格天井



仏教説話『三畜評樹』に基づいた
鳥、猿、象の彫刻



幾何学模様が描かれたモザイクタイル



組まれ、伝統的な仏教寺院の雰囲気をかもしだしている。

動物、妖怪好きとしても知られる忠太は、数多くの動物、幻獣の像を本堂内各所に配置した。なかでも有名なのは、「小さく非力でも、全体を見渡せる鳥のような視線が大切だ」と説く仏教説話『三畜評樹』に基づいて階段に上から順に配置されたという鳥、猿、象の像である。

平成26年（2014年）に本堂・正門などが国の重要文化財に指定された。●